

「幼児の教育」第五十五巻の新年号を迎える。

幼児教育も既にその揺籃時代を脱して、我が国においても、七十数年の歴史を経て来た。しかし年月を経ることによって、それだけその中にある問題が解決されたことにはならない。新しい問題が次から次へと生れてきて、その解決を迫っている。人生で七十数年と云えばすでに老境である。だが幼児教育はまだ青年期にやっと達したところと云えないだろうか。

隣接学問の進歩とともに新しく開けてきた視野の中で、多くの悩みと問題とに直面し、己れを見出そうとして努力しているのが、幼児教育の現在の姿ではなからうか。

このときに当ってすでに半世紀を経過して、世紀の後半

に入った本誌の編輯の方針を自ら問い、又読者諸氏の認識を願ひ、批判と御協力を乞ひたいと思うのである。

「幼児の教育」編輯の基本方針は、長年にわたって本誌の目指してきたものとかわらな伴なうて、幼児教育の関心は移り、幼児教育の方法は変革され、改良されてゆくが、幼児の教育が人間の教育を目指し、深い人間性に立脚して、幼児期の教育の問題を真摯に考究しようとする態度は、五十年の昔も今もかわらないものである。又、かつてはならぬものである。本誌は人間教育としての幼児教育の基本的な考え方の上に立ってきたし、またこれから先も、幼児教育が人間の教育であることをはっきりと認識してゆくであろう。

幼児教育は上級学校への準備教育でもないし、或る側面だけを伸ばそうとする天才教育でもないし、機械化された生き物を作るものでもない。それは生きた人間の教育である。幼児なればこそ、尙更そうである。したがっ

て、我々はたえず、生きた人間に対する洞察力と理解力を養ひ、深める必要がある。

第二に基本的な精神は、幼児教育の創始以来、変らないものであつても、時代とともに社会が変化し、学問が進歩するとともに、幼児教育の関心は変るし、方法論は進歩するという事実を認識せねばならない。社会は動いており、幼児教育自身も動いている。停止とすることはあり得ず、停止したときにはすでに後退しているのである。我々は、生きた人間に目を注ぎながら、新らしく進展する学問分野を理解しつつ、幼児教育を前進させてゆかなければならない。幼児教育は人間を対象とするだけに、その関聯する分野も広く、その各分野の日々進歩する成果をとりいれながら、自らを養つてゆくことは容易でない。しかし何らかの方法によって、隣接諸分野を消化し、特に心理学、教育学の研究成果を綜合しなから進むことが要求されているのである。

第三に、幼児教育自身の分野において、研

編 集 後 記

究と実際とが工夫され、向上してゆく努力がもっと払われなければならぬし、ここに我々の具体的な働らきがある。幼児教育としての研究がもっと集積されなければならぬ。この点について、従来

困難を感じてきたことは、教育の実際と理論がなかなか直接に結びつかないことであつた。その解決には、どうしても、もつと現場

の問題点が把握され、諸方面の協力によって研究が推進されなければならぬ。現場では正確な研究が期し難いけれども、たとえ多少不正確でも、現場の工夫や研究がもっと出でなければならぬのではないだろうか。それがどのような形でないうるかということと事体が、今後の問題であろう。従来、現在の現場の条件では、到底理想的な保育は行なえないと云つて投げ出す傾向はないであろうか。或いは、何か一つの理想的な型にだけ固執し

て、現在与えられている条件で最善の保育がなし得ないというような錯覚がないだろうか。たとえささやかな工夫、研究であつても、与えられた条件で、最もよい保育を行なうための工夫や努力の発表が必要であると思ふ。

第四に、幼児教育の当面している諸種の問題の問題点が明確にされ、いろいろの側面から検討され、意見がかわされることが必要である。今や、解決を迫られている問題は、行政管理の面において、教育の内容について、指導法について、家庭との関聯について、上級学校との関聯について、等々、あらゆる面において山積している。それらの事柄について、先づその主たる問題点が何処にあるのかを認識しなければ、解決がなされないであろう。そしてその解決のために、各方面の意見が遠慮なく披瀝され、検討され、又その参考資料が得られてゆかなければ、解決に達しな

ういであろう。解決しないで持ちこしてしまつて、どこかに癌ができて、正当な発達が阻害されてしまつことは、これまで到我々のしばしば見てきたところである。健全にして正當な斯界の発展のために、諸種の問題に関する問題点を明らかにし、解決のための建設的な努力を払うことが必要である。

第五に我々は視野を広げて、我が国の幼児教育界の世界史の中に立つ位置を認識せねばならない。東西両文明の中間に立つて、政治的にも精神的にも混乱した時期にあって幼児教育の担うべき使命は重い。それは単に一日限りの保育で済まされぬ面を持つている。幼児教育の対象としている幼児は、次の時には、世界の舞台の上に立たされる運命を荷つた人間なのであるから、今日の保育は今日だけで済まされないのである。我々は視野をひろげて、子どもに与えてゆく文化を検討してみなければならぬ。

それとともに、幼児教育界としても、広く海外の幼児教育界の事情を知ることが必要である。これはもちろん、輸入することを意味するのではない。我々の中にある問題は、我々の協力によって解決せねばならず、それによって始めて我々の社会の向上がある。それとともに、世界の幼児のことを考えつつ、我が国の幼児教育界が世界の幼児教育界に貢献なしうるようにしたいと思う。

最後に、我々が考えねばならぬことは、幼児が幼児教育機関のためにあるのではなく、幼児教育機関が幼児のためにあるのだということである。幼児教育のことを論ずるときに、その関心はどこまでも子どもそのものである。子どもに関するあらゆることが、こゝでの関心事である。

多少大きな事柄を並べたて、そんなことをどこまで果しうるか分らないのであるけれど

も、これは編輯子としての願いである。要するに、我が国の幼児が最もよく育ち、よりよい社会をつくってゆくことができるように、我々が協力して建設的な努力をすることが、二十世紀後半の幼児教育界の課題であると思う。そして本誌がその一助となることを、心から願っている。

(本号よりフレールベル館の御厚意により増頁になりました。)

× × ×
× × ×
× × ×

幼児の教育 第五十五巻 第一号

定価金五十円

昭和三十年十二月二十五日印刷

昭和三十一年一月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真

発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレールベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレールベル館にお願い致します。